

平成 22 年 3 月 10 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19791670

研究課題名（和文） 看護技術によって生じる主観的快と自律神経活動の関連

研究課題名（英文） Relationship between pleasure feelings and autonomic nerve activity in nursing care.

研究代表者

加藤 京里（KATO KYORI）

東京女子医科大学・看護学部・助教

研究者番号：70385467

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護技術

1. 研究計画の概要

本研究課題の目的は、看護技術によって、ケアの受け手に生じる「ああ気持ちいい」という快感情と、人の恒常性を保っている自律神経活動がどのように変化するかを明らかにすることである。

研究目的達成のために、看護技術の中でも、臨床でよく行われ、気持ちよい感情が伴う「温電法」に着目し、統合的文献レビューと実験研究によるエビデンスの集積の後、臨床における介入研究を通してその効果を明らかにする。

2. 研究の進捗状況

(1) 「ストレスからの回復過程における腰背部温電法ケアに伴う快感情と自律神経の変化」

健康な女性を対象に実験研究を行った。結果、対照群に比較して、実験群は腰背部温電法によって、計算作業負荷後に、気持ちの良い眠気とともに前額、手掌、足背、平均皮膚温が上昇した。これらの結果から交感神経活動が抑制されたことが考えられ、温電法がストレスからの回復を支えることが示唆された。

(2) 「“温電法”の統合的文献レビュー」

Cooper の Integrative Literature Review の方法を用い、温電法に関する知の統合を試みた。結果、温電法の効果として温熱の部位や方法が異なっても末梢部位の皮膚温を上昇させ、腹部蠕動を亢進させることが抽出された。また温熱の「気持ちよさ」は身体に加わる刺激に対して得られていた。

(3) 「温度の異なる後頸部温電法による自律

神経活動の変化」

閉経後の女性に対し、40 と 60 の 2 種類の温電法を後頸部に貼用し、心身の変化を記述する実験研究を行った。結果、皮膚電気伝導水準で示されるストレスに関しては、60 の熱布による温電法よりも 40 程度の温度刺激のほうが軽減する効果があることが示唆された。

(4) 「更年期女性に対する後頸部温電法の効果」

更年期にある 40 - 50 歳の女性 3 名に対し、後頸部温電法を行い、自律神経失調症状の軽減の有無を実験研究にて確認した。結果、自律神経症状に関しては症状出現時でないという評価が不可能であり、更年期特有の自律神経活動の不安定さにより「温電法」に対する身体反応が一定でなく、評価が困難であった。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している

（理由）

文献レビューと実験研究によるエビデンスの集積がほぼ完了し、今後は臨床における介入、評価研究を行っていく段階である。よって計画に沿っておおむね順調に進展していると評価した。

4. 今後の研究の推進方策

文献レビューと実験研究によるエビデンスの集積がほぼ完了し、これらの結果から温電法の方法は、「後頸部」、温度は「40」、効果指標として「睡眠」に着目して研究を進めることに固まった。

今後は臨床における予備調査、本調査を行

っていく予定であり、現在、所属機関の倫理委員会です備調査の研究計画書の審査を受けているところである。予備調査にて仮説が検証され次第、臨床にて介入、評価研究（本研究）を実施する。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

江上京里、「温電法」の統合的文献レビュー、日本看護技術学会誌、7（2）、4-11、2008、査読有

〔学会発表〕（計 4 件）

加藤京里、後頸部温電法による更年期女性の自律神経活動の変化、一般社団法人日本看護研究学会第 14 回東海地方会学術集会、2010 年 3 月 20 日、静岡県立大学看護学部

加藤京里、温度の異なる後頸部温電法による自律神経活動の変化、第 35 回一般社団法人日本看護研究学会学術集会、2009 年 8 月 4 日、パシフィコ横浜・会議センター

江上京里、ストレスからの回復過程における腰背部温電法ケアに伴う皮膚温の変化、日本看護技術学会第 6 回学術集会、2007 年 10 月 20 日、群馬県前橋市民文化会館

江上京里、腰背部温電法ケアによって生じる主観的快と皮膚温の変化、日本看護技術学会第 6 回学術集会、2007 年 10 月 21 日、群馬県前橋市民文化会館